【 1 】

氏　　名	柴田健志（しばたけんじ）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第 187 号
学位授与の日付	平成 13 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目	スピノザの実践哲学 ——「喜び」の方法による自己認識の試み——
論文調査委員	（主査）教授 伊藤邦武　教授 内山勝利　助教授 川添信介

論文内容の要旨

スピノザの『エチカ』は，神即自然を説く汎神論的形而上学の体系であるとともに，神への知的愛による解脱を説く実践哲学の理論でもある。それは形而上学であるとともに，実践哲学であるというきわめて特異な性格をもっている。そして形而上学が実践哲学を導くというこの特異な主題は，具体的には，物心の平行論という存在論を前提にして，人間における感情の隷属からの解放の可能性を明らかにする，という問題構成において追求される。この問題を追求するためにスピノザが採用した人間精神の働きのモデルは，次のようなものである。すなわち彼は，精神の作用を認知的な側面と欲求的な側面の二面に分けた上で，一方では人間の認識能力を，信念や想像力にもとづく第一種の認識，共通概念にもとづく第二種の認識，個々の個体を共通なものの源泉としての神の本質の変様として直観する第三種の認識という，三種類の認識に分かつとともに，他方では人間の行動の原理である欲望を，喜びの感情と悲しみの感情という基本的動機によって分析し，そこからあらゆる情念の分類を行う。

感情への隷属は不自由であり，感情からの解放を通じた知的認識は自由であるが，隷属と自由とは一方では，行動における喜びの感情の主導性如何として性格づけられるとともに，他方では共通概念による認識の存否として性格づけられる。したがって，スピノザの哲学を全体として理解するためには，物心平行論という存在論がいかにしてこれらの二面の相関を説明するのかを理解する必要があるが，その実践哲学上の主張の具体的な分析のためには，何よりも喜びの感情の増大が同時に第一種の認識から第二種の認識への移行であることのメカニズムが理解されなければならず，さらには第二種の認識がいかなる内容の第三種の認識を可能にするのか，ということが理解されなければならない。

スピノザ哲学にかんする内外の研究はこれまでにもきわめて膨大なものにのぼるが，その関心の焦点は，これまで主として汎神論的形而上学の宗教性，あるいは唯物論との関係，あるいは物心平行論の是非など，基本的に全般的な存在論あるいは宗教論の側面に置かれてきた。この哲学がその表題通りに実践哲学の理論として解される場合にも，その実践の意味は「解脱」という宗教的色彩を帯びたものとして解されるのが常であった。このような従来の解釈にたいして，『エチカ』の理論をその論述の具体的内実に即して，喜びの感情にもとづく実践哲学という独自な立場として解したのが，近年のスピノザ再評価のきっかけともなったドゥルーズのスピノザ解釈である。ドゥルーズの解釈では，スピノザの実践哲学とは，われわれがいかにして能動となりうるか，という主題を追求したものであるが，それは端的には，われわれはいかにして喜びの感情を最大限に感受しうるか，という問いとして語られる。そして，その問いの答えとして与えられるのは，「器官なき身体」という純粋多様体としての自己の個別性の認識の可能性である。

本論は，基本的にはこのようなドゥルーズのスピノザ解釈を支持するところから出発しつつ，この解釈によってもなお問われずに残された問題を追求することによって，「喜びの方法としての自己認識」というスピノザ哲学の主題をより鮮明なものにしようと試みたものである。論者によれば，ドゥルーズのスピノザ解釈は，共通概念による認識に本質的に関与する個別性の認識の重要性を指摘した点では正しいが，なお，なぜ喜びの感情だけが受動を能動に変える力があるとされている

か，という重要な問いを不問に付している。この問いに答えるには，人間の感情において本質的に働くとされる「感情の模倣」という心のメカニズムにもどって，喜びの感情の特異性を明らかにする必要がある。このことはまた，スピノザの哲学をその政治理論や心理学を含む，ひとつの人間論として解釈しなおすことでもある。そして，このメカニズムを主軸においてスピノザの自由論を解釈すると，彼の自由の理想は，器官なき身体の認識である以上に，「自己のイメージをもたない自己認識」であることが帰結すると言われる。これらの主張を展開するために，本論の叙述は，スピノザの政治哲学から社会心理学へ，社会心理学から実践哲学へ，という順序を辿り，最終的にスピノザの「自己」論へと収斂することになる。本論は全体として五章からなり，それに序論と結論とが付されている。各章の主題と要旨は以下の通りである。

第一章「政治論における「共同の権利」——共同体の仕組み」では，スピノザの『政治論』における権利論が論じられる。これはスピノザの実践哲学の出発点にある善悪等の価値概念にかんする自然主義的観点の徹底性を明確にし，本論の扱う実践哲学の方法論的特徴を確認するとともに，この観点から帰結する「欲望」論の骨格を明らかにするための予備作業である。スピノザにおいて個々の人間の権利とは，その力そのものであるとされる。そして現実に行使される力は欲望と呼ばれる。人間の欲望は自己の本性に適合するものとそうでないものとを選別する。実践哲学の課題は，この欲望をどのようにして導くかという点にあるが，この課題に答えるためには欲望がどのような条件下で行使されうるかが明らかにされなければならない。論者によれば，スピノザの政治論はこの問いに答えるものである。すなわち，人間の単独の力は，彼がその一部である自然の力に比して無に等しいゆえに，それが現実に行使されるためには，多数の人間が結集して集団的な力とならなければならない。そして権力は力によって規定されるために，この集団的な力によって，「共同の権利」というものが生まれる。この共同の権利という概念が自然的かつ社会的存在としてのスピノザの人間論の出発点を形成するのである。

第二章「模倣の論理——エチカの社会心理学」は，スピノザの喜びの方法にもとづく実践哲学の解明のためのもう一つの予備作業として，彼の社会心理学の基礎概念である「感情の模倣」という心理的メカニズムを解明する。共同の権利によって生存が確保された人間が，実際に社会のなかで感情に促されて欲望を行使するのは，この心理的メカニズムによってである。この概念をめぐる議論は『エチカ』の第三部で展開されているが，その要点は，人間が自分と同類の者がある感情に刺激されていることを表象すると，それだけで自分もまたそれと同じ感情に刺激されてしまうということである。この心理的現象への注目がスピノザの実践哲学にたいしてもつ意義は次のように考えられる。受動的である限りの人間，すなわちスピノザの意味での自由ではない人間は，自然全体のなかでの個別的変様としての自己にかんして真の認識を欠いている。しかし受動的人間にあっても自己意識が欠如しているわけではない。受動的人間にあっても自己認識に類似したものはあるが，その際にその人間が自己として心の中に思い浮かべているものは，真実には他人の表象によって媒介されたイメージである。第一種の認識にとどまる人間が受動的であり，自由ではないということの意味は，その自己意識が真の自己ならざるもののイメージであるということに帰着するのである。

第三章「スピノザの方法——「喜び」の感情はなぜ理性に一致するのか」は，第一種の認識にも第二種の認識にも結びつく「喜び」の感情を分析する。第一種の認識とは感情に隷属した状態での認識であり，基本的には感情の模倣の論理に従って生じる喜びと悲しみに支配された精神状態である。他方第二種の認識は喜びのみによって促される認識であり，その内実は，人間に作用を及ぼす外部のものと人間との共通の性質を対象とした認識である。したがってスピノザの実践哲学は，喜びの感情がいかなるしかたで人間の認識を「共通概念」にまで発展させうるものであるかを説明しなければならないが，そのために前提されるのが，喜びとは身体の活動能力の増大に平行して生じる感情であるという，物心平行論のテーゼである。しかし単に精神と身体との平行性が前提されるだけでは，喜びの「増大」の根拠は明らかにならない。そこでスピノザは，人間の身体が性質の異なる，異なった運動—静止の割合をもつ個体からなり，これらの個体がさらに下位の個体からなるという独自の身体論を用意している。この身体論を前提にしてはじめて，「身体全体がより多くのしかたで刺激を受け，それに平行して精神がより多くのものを思惟することができるようになる」という喜びの感情のメカニズムが明らかになるというのが，本章の主張である。

第四章「第二種の認識——共通概念とは何か」は，共通概念による第二種の認識が本質的に個別性の認識をあわせもつということを論じる。共通概念による認識は文字どおりには異なった事物間に存在する共通性の認識であるが，それだけでは共通概念の認識が喜びの感情の増大を伴うということが理解できない。また，第二種の認識が物の共通性の認識のみにとど

まるかぎり，この認識から第三種の個体の本質の認識への移行の可能性が理解できない。このことがこれまでスピノザ哲学の解釈において，第三種の認識を特異な神秘的直観とし，その非合理性を指摘する根拠となってきた。本章で論者は，喜びと結びついた共通概念による認識が，多様体として自己の身体と外的世界との共通本性の認識という意味で，共通性の認識と個別性の認識の両面をあわせもつことを論ずる。このような事態が可能となるのは，前章で論じられた独自な身体論のゆえであるが，この身体論と，「身体の変様の観念の観念」としての反省的意識という理論によって，喜びの増大とは，人間精神が喜びの受動的感情において自己の個別性を暗示されている状態から，それを自己自身の内に見出すような状態への移行である，ということが明らかにされる。

第五章「理性と名誉——エチカにおける自由人」は，本論のこれまでの分析を総合して，『エチカ』第五部の，喜びの増大の結果としてもたらされる「自由人」の境位の分析を試みる。周知のように，スピノザの自由人の境位は「神の知的直観」と等置される「神への知的愛」として表現されるが，このことはまた，すべての人間に共通な善への欲望としても説明されている。すべての人間に共通の善とは，自然のあらゆる多様性に適合するような身体の変様を指すが，それはとりもなおさず自然即神の能力の発揮としての，最大限の喜びに促された行為ということでもある。この喜びに促された行為を，単なる受動的感情としての喜びに促された行為と対比してみると，そこには次のような自己認識の相違が存在することが明らかになる。すなわち，想像力や感情の支配のもとにある人間の自己認識は，物心平行論から帰結する「感情の模倣」の論理のゆえに，本質的に他者の喜びに規定されたものになり，「名誉」という価値基準を核とした自己認識となる。これにたいして，理性の下で自己の個別性を自然全体の内なる力の発現と捉える者は，自己を他者の欲望のなかに投射されるイメージとして見ることがない。それは本質的に名誉欲から脱却した認識のありかたであり，この「イメージなき自己認識」こそ，スピノザのいう「自由」あるいは「高貴」ということの核心であるというのが，本論の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は表題にあるように，スピノザの『エチカ』における実践哲学を，「喜びの方法による自己認識の試み」として解釈しようとしたものである。スピノザの哲学は神即自然の形而上学を背景に，物質と精神の平行論という独自の存在論にもとづいて，感情への隷属から脱した理性による自由の達成の可能性を説明しようとするものである。この哲学については，これまで幾多の研究がなされてきたが，その代表的なものとされるブランシュヴィック，ゲルー，アルキエの研究はいずれも，スピノザを何よりも合理主義的認識論者と捉えて，その合理主義的認識論の枠のなかで，「神への知的愛」とも「神の本質の認識を通じた個体の本性の直観」とも言われる「人間の自由」の意味を明らかにしようとしたものであった。このような合理主義的あるいは知性主義的スピノザ像にたいして，実践哲学者としてのスピノザを前面に押し出し，その独特の性格を浮き彫りにして，近年のスピノザ再評価のきっかけをなしたのが，ドゥルーズのスピノザ解釈である。ドゥルーズの解釈では，スピノザの実践哲学とは，人間がいかにして「能動」となりうるか，という主題を追求したものであるが，それは端的には，人間がいかにして喜びの感情を最大限に感受しうるか，という問いとして問われる。そしてこの問いの答えとして与えられるのは，「器官なき身体」としての自己の身体の個別性の認識というものであるとされる。

本論は基本的にこのようなドゥルーズのスピノザ解釈を支持するところから出発しつつ，この解釈によってもなお問われずに残された問題を追求することによって，スピノザの実践哲学がきわめて特異な「自己認識」の哲学であることを，さらに鮮明なものにしようとしたものである。論者によれば，ドゥルーズによって不問に付された問いとは，なぜ喜びの感情だけが受動を能動に変える力があるとされるのか，という問いである。論者はこの問いにたいしてスピノザが，人間精神における「感情の模倣」という根本的な心理的現象を基盤にして説明を与えていると解釈する。スピノザのこの概念は，『エチカ』だけではなく『政治論』を含む彼の哲学全体にわたって前提されている概念であり，この概念を鍵とすることによって，政治哲学から社会心理学，実践哲学という幅広い範囲での彼の哲学を解釈することが可能になる。それとともに，この鍵概念を用いることによって，感情への隷属としての受動的状態と対比される自由な人間の能動的状態が，器官なき身体の認識であるということ以上に，「自己のイメージをもたない自己認識」という特異かつ「困難な」精神状態であることが特定できる，というのが論者の主張である。

本論は以上のような主張のために，『エチカ』および『政治論』のテキストの厳密な解釈を提示するとともに，ブランシ

ュヴィック以下の代表的なスピノザ解釈にたいする精緻な批判を行っている。論文全体の議論は多岐にわたるが，全体として論旨は一貫しており，整合的なスピノザ解釈となっていると思われる。本論において特に優れているとみなしうるスピノザ解釈上の側面としては，以下の点をあげることができる。

1　スピノザの『エチカ』は幾何学的秩序に従って叙述された，基本的命題間の演繹的連関をきわめて明確に提示した体系であるが，なお解釈者の理解を困難にする論理的飛躍と見られる部分が少なくない。そうした解釈上の困難のうちでも，特に多くの解釈者を悩ましてきたのは，事物間の共通性の理性的認識にもとづく第二種の認識から，神の認識を介した個体の本質の認識としての第三種の認識への移行の論理である。この問題にたいして，たとえばアルキエはこの二つの認識のあいだには調和させることのできない根本的断絶があると明言しており，ゲルーもまた，第二種の認識から個体の普遍的本質を認識するところまでは進むことができるが，個体の個別的認識にまで至ることはできないと解している。これにたいしてドゥルーズはこの難問を，第二種の認識においても，現実的経験の契機が本質的に関与するかぎりで，物の共通性とともに個別性が認識されているという重要な指摘を行うことで解決しようとした。論者の解釈はこのドゥルーズの立場を継承するものであるが，同時に彼がこの共通認識の経験的契機を具体的には「器官なき身体」としての端的な「自己」の把握であると解することには反対する。このことは，『エチカ』第二部の「身体の変様の観念」と「身体の変様の観念の観念」の区別を重視し，後者の内容を厳密に検討して主張されていることであり，これまでのスピノザ解釈において曖昧になっていた点を正す，きわめて重要な指摘である。

2　論者によれば，ドゥルーズがこのような混同に導かれたのは，スピノザのいう第一種の認識としての想像力の理論，特にその「感情の模倣」という社会心理学的側面を見のがしたためであるとされる。感情の模倣とは単純化していえば，人間が自分と同類の者がある感情に刺激されていることを表象すると，それだけで自分もまたそれと同じ感情に刺激されてしまうということである。論者はこの心理的メカニズムに注目することによって，スピノザの政治論と実践哲学に共通する社会心理学的前提を洗い出すことに成功しているが，同時にこの概念を使って，自我にかんするスピノザのきわめて現代的な観点を照らし出すことにも成功している。スピノザの感情の模倣に促された擬似的自我の形成は，厳密にいえば自我のイメージを他者に投射することではなく，他者のイメージを想像的に自我に投射することであり，それはほとんどの場合無意識的な投射である。したがってこの自我「像」がもたらす反省的表象は，ドゥルーズのいう自我の認識でもなければゲルーのいう「自己意識」でもなく，またマシュレイのいう「統覚」の成立でもない。第二種の認識としての共通概念による認識が，理性による反省的認識といっても，この擬似的自我像を下敷きにして成立する不十全な認識であるという論者の指摘は，『エチカ』のテキストの難解な箇所に光を投げかける重要な指摘である。

3　論者は感情の模倣の論理によって自我の認識の特異性を確認する一方で，喜びの感情の増大に対応する身体論の特徴にも注目している。スピノザにおいて喜びの感情とは，身体と外的世界との運動と静止の割合の一致として理解されているが，その増大とは身体としての自我と外的世界との共通性の把握を通じて，身体のより多様な活動能力が発揮できるようになることを意味する。したがって第二種の認識から第三種の認識に進むことで達成される「自由」とは，最大限の喜びの感受であるとともに，活動能力の最大限の発揮でもある。このことはしかし，他面では，自己に「類似している」と想像された他者から投射された自我像を完全に克服することによってのみ達成される。したがって，自由としての自己の個体性の認識とは，他者にもとづくイメージを脱却した自己認識という特異な境位な指すが，それはきわめて例外的な状態と考えられなければならない。論者はこのような特異な自由概念のゆえに，スピノザがそれを「高貴」かつ「困難」な境位であるとしたのだと解するが，これは一般にきわめて神秘的とされるスピノザの結論の独自性を理解しやすくさせる，説得力に富んだ解釈である。

以上のように，本論はこれまでの代表的なスピノザ解釈の欠陥を補い，スピノザの思想の独自性と現代的意義とを明らかにする優れた論文である。あえてその不十分な側面を指摘すれば，たとえば『エチカ』の必然性の理論や無限性の理解など，総じて形而上学的側面についての理解が表面的なものにとどまっていると思われる。しかしこれらの点は本論の価値を大きく損なうものではない。論者の今後の研究の深化に期待したい。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2001年4月10日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問を行った結果，合格と認めた。